

## 女人の穢れを許容する時宗と能

松岡心平

柳田国男の『女性と民間伝承』には、和泉式部あるいは小野小町が瘡(ハンセン病・梅毒などの皮膚病)をわずらい、

南無薬師諸病疾除の願立てて

身より仏の名こそ惜しけれ

という歌を詠むと、薬師如来が、

村雨はただひとときのものぞかし

おのがみのかさそこに脱ぎおけ

と、夢の中で返歌し、皮膚病がたちまち直った、という話が見える。もちろん「みのかさ」には、「身の瘡」と「簑笠」の二重の意味が込められている。

柳田は、このような伝承の全国伝播の担い手として熊野比丘尼(歌比丘尼)をあげ、彼女たちのたまり場が、室町時代に時宗化した京都の誓願寺であったと推測している。この柳田の考えをもとにすれば、熊野帰りの一遍上人が誓願寺で念仏札を配っているところへ和泉式部の亡霊があらわれ、札をもらって舞を舞うという能「誓願寺」の背景が理解できるだろう。

明川忠夫氏の『小町伝説の伝承世界』(勉誠出版)では、「小町、深草の少将を偽り、命を

捨てしめし報いとて世に交わり難き病を受けて『小野山正観寺法輪院縁起』文政六年成立」というような、「四国松山の小町薬師霊験伝承」も取り上げられている。江戸時代になると、能「通小町」のストーリーが加わって、深草少将の百夜通いとその死の報いによって小野小町は瘡の病いを受けたという話も出てくるのである。

問題は、明川氏も説いているように、人間をたちまち非人・乞食の境遇に落とし込んでしまう業病としての「瘡」を和泉式部や小野小町が抱え込んだけれど救われたという伝承と、一遍が開いた時宗とのかかわりである。

女性差別や癩(ハンセン病を含む皮膚病)への差別を、あるうことか仏教が強化していった因果についてはかつて横井清氏が『中世民衆の生活文化』(東大出版会)などで述べたところである。

そうした仏教の諸宗派の中で、この問題に最も正面から向き合って解決を与えようとしたのが、一遍(一二三九〜八九)と時宗教団であった。その発端は、一遍の熊野での回心にある。一遍は、女や穢れを忌まない、日本

の最も根元的な地霊である熊野権現のお告げ「信不信をえらばず、浄不浄をきはらず、その札をくばるべし」によって回心し、信心者・不信心者の区別なく、そして淨いもの・不淨のものとの差別なく、念仏札を配るのだという布教の確信を得た。

一遍の生涯をその至近距離から最も正確に描いた『一遍聖絵』には、僧と尼達が常に一団となって遊行し踊り念仏をする姿が描かれ、また彼らの周囲には必ず、身体障害者を含んだ覆面の非人や乞食たちが精細に描き込まれている。こうした非人や乞食たちの姿から、網野善彦氏は、『一遍聖絵』の作者が、「童形」の人々、「犬神人」「非人」と一遍、時宗との深い結びつき、一遍の教えによる「非人」の救済を、絵巻全体を通じて、ひとつの重要なテーマとして語ろうとしたことは確実と考えている(『一遍聖絵』の非人と童形の人々)『網野善彦著作集』十一巻)。覆面の非人の中には癩者もいたにちがいない。ただし、癩者救済に関しては、奈良坂から奈良市中の乞食まで癩者の乞食を背負って往還したと伝えられる忍性(一二二七〜一三〇三)の所属する西大寺流律宗の方が、ラディカルな救済姿勢を示していると見られなくもない。しかし、律宗のそれはあくまで上から目線であって、時宗の方に非人たちを同列に見て彼らに寄り添おうとする姿勢は強く感じられる。少なくとも、女性の穢れへの差別をなくす方向に関しては、時宗の独壇場である。

この二つの宗教グループが、善光寺阿弥陀如来への参仕をめぐって、一三〇〇年前後に

争っている。それは女性の小さな解放をめぐる角逐であり、また世阿弥が改作した能「柏崎」の重要テーマの一つともなった。

一四〇〇年前後に成立したと見られる『善光寺縁起』には、次のような時衆対律僧の話が見える。少し長いが引用しておこう。

#### 如来御詠歌の事

中ごろ、念仏堂に四十八人の時衆これあり。不律、極まりなし。これによりて権別当これを改易す。鎌倉極楽寺より律僧を請ひ、浄行持律、これを行はる。ある時、念仏堂の中に、不思議の井あり。この井、すなはち遠江国桜井池に通ずと云々。この井より一霊蛇出来し、僧を悩ます。この律僧みな色を失ひ、魂を消す。ある夜、夢覚の間、瑠璃殿の御戸自ら開き、中より老僧、濃き墨染の衣、御顔色少し弊れ給ひ、物思ふ姿して、気高き御声にて衆僧に告げて云く、

五十鈴川清き流はあらばあれ

我は濁れる水にやどらむ

このごとく三遍打ち返し詠じ給ひ、我悪人を濟度せんと思ふ、汝らの如き貴僧はさもあらばあれ、と仰せらる。衆僧、夢中に申す様、さては吾らこの寺に止住の事、御本意に背くやと申す。如来打ちうなづき給ふ。(中略)夢覚めおはんぬ。すなはち御詠歌に驚き、時衆、この道場に還居さると云々。

はじめ念仏堂に参仕していたのは時衆であったが、「不律」極まらないので律僧にかえたところ、彼らは蛇に悩まされ、さらに夢中に

善光寺如来の御詠歌を得得したので、これに従って再び時衆がカムバックした、という話である。

一四〇〇年頃に成った『善光寺縁起』よりも、もつとリアルタイムに両者の競合を語るのが『沙石集』である。しかもそれは、弘安六年(一二八三)頃の初稿に見えず、徳治三年(二二〇八)成立の内閣文庫本にのみ見えるので、一三〇〇年前後の生な話といえよう。

常州北の郡と云ふ所に、不断念仏の堂あり。事の次に参詣して侍りしに、寺僧の語りしは、この旦那、善光寺の一光三尊を鑄奉りて、この堂に安置して、律僧をも信じ、また念仏をも信じ給へる人にて、律僧にや行ずる、不断念仏をや行ぜざると、思ひ煩ひ給ひけるころ、彼の信じ給へる律僧の夢に、墨染の衣著給へる僧来たりて、詠じて云く、

伊勢島や深き渚はさてあれ

我は濁れる水にやどらむ

この夢、善光寺の御告と思ひあはせて、且つは、粗申し合せらるる事なりければ、起請文を書きて、この事を旦那に申さるるによりて、不断念仏を置かれて侍り。「不断念仏」とは「時衆」と考えていいだろう。善光寺阿弥陀如来の模像が置かれる常陸国(茨城県)の念仏堂参仕をめぐる、律僧でなく時衆を選んだという実話である。

この『沙石集』の話の要約を詞書にして歌を載せるのが『夫木和歌抄』(一一三〇)であり、その歌は、

伊勢の島や清き渚はさてあれ

我は濁れる水にやどらむ

である。さらにこの歌は、早くも翌々年成立の『玉葉和歌集』『釈教歌』の部に載り(二六一七番)、全国的な公認歌に格上げされる。その時の歌形は、

伊勢の海の清き渚はさもあらばあれ

我は濁れる水にやどらむ

であり、「是は善光寺阿弥陀如来の御歌と云」という詞書がついている。

これらの御詠歌は、上の句に若干異同はあるものの、要するに、清浄に徹する伊勢に対して、不浄や汚濁を許容する、あるいはそちらの側にあえて身を置こうとする、善光寺の阿弥陀如来の立場の表明なのである。

一遍は善光寺に何度も参拝しており、やがて一遍の時衆は善光寺如来堂の外の妻戸柵に根柵を持ち、妻戸時宗(衆)と呼ばれて、善光寺の大きな勢力となる。一方、律宗では、忍性が文永四年(一二六七)、鎌倉の極楽寺に移住して以来、ここを拠点として北条政権と強く結びつきながら、関東での律宗の教線拡大がはかれるのである。

この歌は、一三〇〇年前後におこった。律宗と時宗の思想的角逐も含む勢力争いの中で、せり上がってきた歌であり、「浄不浄をきはらず」という女性に優しい時宗の肩を持つ善光寺阿弥陀如来の立場を表明する歌として詠み出されたのであった。

江戸時代に成立した『善光寺縁起集註』や『善光寺別当伝略』によれば、この如来の御詠歌によって、禁じられていた女人の善光寺如来堂の内陣入りが解かれた、とされる。

とすれば、世阿弥自筆本「柏崎」が女物狂の内陣入りの押し問答を精細に書いた理由がわかってくる。善光寺は、不浄をいとわない時宗の力によって、東の熊野ともいうべき、まれに女人が奥深くまで入り込める聖地となったのであり、『善光寺史』を書いた坂井衡平氏が早くに指摘したように、「柏崎」は、女人の内陣突入を記念する能でもあった。

もつとも『善光寺縁起集註』では、女性が内陣に入るためには、月水除けの護符が必要だとし、さきの如来の御詠歌に加えてもう一首、

本もとよりも塵ちりに交はるわれなれば

月の障さやりは苦しからまじ

という歌をあげている。

この歌は、もともと熊野権現の御詠歌であった。『風雅和歌集』（一二四九年頃）「神祇歌」中の二一〇九番歌がそれである。

もとよりも塵ちりに交はる神なれば

月の障さやりも何か苦しき

是は、和泉式部熊野へ詣でたりけるに、

障りにて奉幣かなはざりけるに、晴れ

やらぬ身のうき雲のたなびきて月の障

りとなるぞ悲しき、と詠みて寝たりけ

る夜の夢に、告げさせ給ひけるとなむ

この当時、熊野比丘尼と時宗との関係はまだ始まっていないかもしれない。しかし、一遍、熊野、和泉式部のラインを考えると、この歌は、女人の不浄、穢れを許容する熊野権現のみならず時宗の思想の浮上を記念し、これを全国的に喧伝する意味をも担っていたのではなからうか。

（東京大学教授）